

4人による分割統治で、誰が上位かなどでもめなかったのですか？ そもそも専制君主政をはじめたディオクレティアヌスが、どうして分治制をしたのですか？

専制君主政を始めた皇帝が、どうして分治制をしいたのか、という問いから考えていきましょう。そもそも「専制君主政」とは何でしょうか。世界史Bの教科書をみていくと、ディオクレティアヌス帝の業績として、軍や行政制度の改革と並んで、皇帝権が強化されたことがあげられています。「専制君主政」は、どちらかといえば後者、つまり皇帝権の強化の結果として言及されているようです。具体的にみていくと、皇帝を神として礼拝させたとか、ドミヌス(奴隷からみた「主人」の意)と呼ばせたとか、ペルシア風の儀礼を導入した、といった内容です。その実態をみてみましょう。

おそらく、これらの教科書記述の根拠として初めにあげられるのは、アウレリウス・ウィクトルという歴史家の『皇帝列伝』にあるつぎのような一節です。「彼はすべての人々のうち、自らをカリグラとドミティアヌスの後で、ご主人様(ドミヌス)と公然と言わせ、神のごとく崇拜させ呼ばせることを受容した最初の人だった」(アウレリウス・ウィクトル研究会訳『上智史学』63、2018年、p.112)

ここに出てくるカリグラとドミティアヌスというのは、暴政におちいって暗殺された1世紀の皇帝たちです。自身を「神」あるいは「主人」と呼ばせるというのは、皇帝としては批判されるべき行為だったようです。しかし、実際はそう単純ではありません。

まず、皇帝を神として礼拝するという慣行は、帝政を確立したアウグストゥスの時代からみられました。アウグストゥスは、首都ローマでは自身が神として礼拝されるのを拒んだのに対し、属州ではローマ国家を神格化した女神ローマとの合祀というかた

ちでならば、それを受け入れたといえます(スエトニウス〈国原吉之助訳〉『ローマ皇帝伝 上』〈岩波書店、1986年〉p.150)。この慣行は、ヘレニズム諸王が神として礼拝されていたことに由来するといわれています。問題は、共和政期に大きな権威をもっていた元老院議員たちに「神」と呼ぶことを強いた場合に生じたのでしょうか。しかし、帝政が定着するとともに、元老院の権威は低下していきました。ディオクレティアヌス時代の元老院については、史料が限られていますのではっきりしたことはいえませんが、皇帝を神として礼拝することだけで、この時代以降を「専制君主政」と呼ぶのは難しそうです。

つぎに、自身を「ドミヌス」と呼ばせたという点についてみてみましょう。「専制君主政」という言葉は、ラテン語で「主人」を意味する「ドミヌス」から派生した「ドミナートゥス」という言葉の日本語訳です。とすると、皇帝を「ドミヌス」と呼ばせるようになったのは重要な変化に思えます。しかし、五賢帝時代、ローマ帝国の最大版図を達成し「最善の元首」と呼ばれたトラヤヌス帝ですら、元老院議員から「主人」と呼ばれることを許容していました。『博物誌』を書いたプリニウスの甥で、元老院議員だった小プリニウスは、属州総督として赴任した先から皇帝に対して「ご主人様」と呼びかけています(国原吉之助訳『プリニウス書簡集』〈講談社、1999年〉p.384以下では「主よ」と訳されています)。属州総督が皇帝に問い合わせた書簡というのは、現代の感覚では公文書ですし、この書簡集はのちに出版もされました。皇帝が公然と「主人」と呼ばれているようにみえます。

皇帝に「ご主人様」と呼びかけることが「専制君主政」の始まりともいいがたいようです。

ペルシア風の儀礼を導入したという点はどうでしょうか。この点については、エウトロピウスが「彼はローマ帝国に初めてローマの自由よりも王風の慣習形式を持ち込み、そして彼自身に拝跪することを命じた」（エウトロピウス研究会訳『上智史学』58、2013年、p.185）と述べているほか、アンミアヌス・マルケリヌスも「ディオクレティアヌスがそもそも最初に、異国の、王に対する慣わしで崇められるよう定めたのであった」（山沢孝至訳『ローマ帝政の歴史1』〈京都大学学術出版会、2017年〉p.92）と述べています。しかし、これだけです。先ほどのアウレリウス・ウィクトルも、ここであげた2人も、ディオクレティアヌスが退位してから半世紀以上たった4世紀後半の人物です。ディオクレティアヌスの時代に宮廷儀礼がかわったのだという意識があったことはわかりますが、実際にどのような変化があったのか、詳しいことは実はわかっていないのです。

以上のように、ディオクレティアヌス帝の時代以降を「専制君主政」と呼ぶ根拠は実は非常に脆弱です。この時代に、軍や行政制度にかかわる様々な改革がおこなわれたことは碑文や法といったほかの史料から確認できますが、それも、公的な法典がこの時代に初めて編纂されたとか、この時代のパピルスが偶然大量に残っている、といった事情に影響された部分もあります。そのため、アウグストゥスの創始した「元首政」に対してディオクレティアヌス時代以降を「専制君主政」と呼ぶという教科書的な説明は、現在では必ずしも一般的ではありません（たとえば、M・クリコフスキ〈阪本浩訳〉『後期ローマ帝国史Ⅰ——帝国の勝利』〈白水社、2022年〉を参照）。ディオクレティアヌスのおこなった諸改革も、それまでの皇帝たちの試行錯誤を集大成したものと理解されており、彼を「最後のローマ皇帝」と呼ぶ研究者もいるほどです（B・レミィ〈拙訳〉『ディオクレティアヌスと四帝統治』〈白水社、2013年〉p.146）。

そう考えると、「分治」の実態もみえてきます。284年のディオクレティアヌスの即位に先立つ半世紀は、反乱やクーデタで皇帝がつぎつぎとかわる政治的には混乱した時代でした。いわゆる軍人皇帝時代です。帝国東部で即位したディオクレティアヌス

は、即位の翌年、盟友マクシミアヌスを副帝に任じ、帝国西部での反乱鎮圧をゆだね、自らは東部の安定化につとめました。さらに、マクシミアヌスを自らと同等の正帝に引き上げ、北方のゲルマン人や東方のササン朝といった外敵に対処する必要から、293年にはコンスタンティウスとガレリウスを副帝に任じます。こうして、「テトラルキア」が完成し、統治が安定していきました。この「テトラルキア」が「四分統治」と訳されてきたわけですが、帝国が四分割されたわけではありません。帝国はあくまでも不可分でした。4人の皇帝たちはそれぞれ担当領域を内外の敵から防衛し、ディオクレティアヌスによって決定された政策をほかの3人がそれぞれの担当地域で実施していました。アウレリウス・ウィクトルは、テトラルキアの皇帝たちが「ヴァレリウス（ディオクレティアヌス）を、父として、偉大な神のように敬仰していた」（同訳『上智史学』64、2019年、p.79）、あるいは「彼（＝ディオクレティアヌス）の意向によってあらゆることが行われた」（同p.80）と述べています。それをふまえるなら、たんに皇帝が4人いたという意味で「四帝統治」と訳した方が誤解を招かないのではないか、と個人的には思っています。

ディオクレティアヌスがつくりあげたこの体制においては、彼が帝位にある限り、誰が上位かについてもめる余地はありませんでした。ただし、逆にいえば、ディオクレティアヌスはその地位を離れたとき、その問題が顕在化することになります。即位から20年以上を経た305年、ディオクレティアヌスは、同僚のマクシミアヌスとともに、歴代のローマ皇帝としては唯一、自発的に退位しました。副帝だったコンスタンティウスとガレリウスが正帝に昇格し、新たな副帝2人が任じられます。この2人はガレリウスに近く、新体制はガレリウス優位だったといわれています。しかし、翌306年にコンスタンティウスが急逝すると、その子コンスタンティヌスがガレリウスの意向を無視して即位を宣言しました。それをみて、退位した先帝マクシミアヌスの息子も帝位を宣言し、ガレリウス主導の新体制は混迷を深めていきます。そして、ガレリウスが病死したあと、コンスタンティヌスが帝国の再統一に乗り出し、新たな覇者として君臨することになるのです。

（おおしみず・ゆたか／滋賀大学教育学部教授）